



取材日:平成25年8月9日(金)

取材先:NPO 法人 伊賀の伝丸(三重県伊賀市)

レポーター名:三重大学人文学部法律経済学科4年 福田加緒理

## NPO 法人 伊賀の伝丸 取材レポート

### - 共感し、伝えたいこと -

三重県に住む外国人比率は2011年末現在で2.45%、全国第3位である。中でも、人口比約4.76% (2011年4月現在) 4,748人の外国籍住民が暮らす街、伊賀。この伊賀で「言葉の壁を乗り越えてともに住み良いまちづくりをする」ことを目指し、多文化共生推進に励んでいるのが『伊賀の伝丸』である。

伝丸は、1999年4月に通訳のできる者など約20名で設立されたNPO法人だ。現在は旧上野市の中心市街地に事務所を置き、翻訳・通訳・多文化共生生活相談・外国出身のこども支援などを行っているが、この記事では、『通訳』に焦点を当てる。

伝丸で活動する菊山順子さんは、「お子さんの三者面談の付添いをする。だって子どもは、先生に言われた自分の悪いことを親にそのまま伝えようとはしないでしょう」と話す。こうして伝丸が支援をすると「親に教育へのやる気を与えることができ、進学率も上昇した」そうだ。また、「病院での診察時、毎週付き添いをすることもある。受付の時点で通訳がないと診察してもらえないこともある」他、今回の取材では工場の研修、家のローン、法廷など様々な場面での活動を拝聴した。すると、言葉の通じない国で生活することは思っていた以上に困難なことばかりであることに気付かされた。この世の中は、多文化共生を長年謳っていながらも、実際は細かな場面どころか現場まで目が向いておらず、大変生にくい環境の中で外国から来る人々は生活しているのだ。

だからこそ、このような伝丸の活動が外国人に大きな力を与えている。それは、日本人対外国人だけではない。前述した伊賀の外国籍住民は100国籍にものぼるため、文化や習慣の違いから摩擦も起きやすい環境といえる。だがそれも、伝丸の存在によって軽減されている。一見すれば伝丸の活動は日本人対外国人だが、それだけではない。伝丸を通じて外国人同士が知り合って仲を深め、お互いが自ずと他文化に触れあうことで理解していく流れをも創りだしているため、お互いがわからない故の摩擦が起きにくいのだ。

和田京子代表と菊山さんは、一連の活動について「助けなければ！という思いがメインではない。伊賀や自分たちのこれからをよろしく、という想いでやっている」と言った。そう思えるほ

どに伊賀を愛し、住み続けてくれる外国人が多いのだろう。事実、伊賀の市民権を獲得する、永住しようとする外国人も珍しくないそうだ。最後に二人は、「いろんな人の人生をちょっとのことで変えられる『究極の自己満足』だよ」と活動を表現したが、決して親切心だけではないこの想いがあるからこそ外国人からの信頼を得られていると感じた。この『究極の自己満足』が他者も満足させていき、今後の伝丸と、伊賀の多文化共生をささえていくのだろう。

#### - 提案できること -

率直な意見としては、もっと活動範囲を広げればいいのに、と思った。だが、活動範囲を広げる予定はないのかと質問してみると、「公共との付き合いあってこそその面が強く、展開していきにくい」とのことだった。とはいえ、ノウハウの提供は多様な地域で行っているようだったので、このつながりを生かして、さらなる展開を期待したい。

外国人との関係において、文化や習慣の違いによって日本人が気分を害していること、一方的に差別視していることは否定できない。もちろん、彼らが悪い、ここは日本なのだから日本の文化に合わせるべきだとは毛頭思っていないが、お互いを理解できず、分かり合うきっかけもないが故にこうなっている現状は非常に心苦しい。それはなぜかと考えれば、「自分より上の世代は、異文化の生活環境やその中で生活してきた人々と交流をもったことが少ない人が多いからではないか」という自論を持った。私たち世代では異文化に関する教育を受ける機会が存分にあり、私の義務教育時代にはクラスに1人は三世やハーフで外国文化の下に成長してきたが、これほど多様化したのは近年の話だろう。

これに基づいて、まずは他地域に関して、ノウハウの提供を行っていることでつながりがある地域の中でも外国人比率が極めて高い地域を中心に、出張イベントのような形式で交流会を展開してはどうだろうかと思う。その際、地元大学に呼びかけをして国際交流に興味のある学生の力を借りることができれば、より集客も望め、交流しやすい場の形成も期待できるだろう。以前、伊賀で、同じ地区に住む外国人と日本人が同じテーブルについて会話をする「テーブルトーク」を自治会と連携して行ったとのことだったが、それと同じようなことをして頂ければ、外国文化や外国人に触れる機会が生まれ、少しずつでも偏見がなくなり、多文化共生の根をはっていくことができるのではと思う。

#### - 感じたこと、学んだこと -

現場に身を置いているからこそその話をいくつも聞くことができたが、もっと上手くお話を引き出すこと、聞いたお話をうまく文章化することができずなんとも申し訳ない気分になった。けれど、多文化共生とは、日本という国の中で『日本人と外国人』が共生することではなく、『日本人と外国人とまた別国の外国人』がどう付き合っていくかという、本来広い視野・数多くの視点でみるべき問題なのだという当たり前だけれども気付いていなかった事実を知ることができたいい機会であった。この事業を『究極の自己満足』と二人は表現したが、やはりお金にかえ難い充実感を見出している人たちだからこそ、外国人にも信頼され、事業が継続できているのだろうと感じた。